

機能イメージから生成されるサイン音の擬音語表現にみられる特徴

～家電製品に焦点を当てて～

0832164 渡邊祐樹

指導教員：山崎治 准教授

1. 背景

現在、警報などの目的で、音声以外の音による情報伝達が様々な場面で行われている。これらのメッセージを伝える音は、視覚のサインになぞらえて「サイン音」と呼ばれている（日本サインデザイン協会1998）。

サイン音を設計するにあたって「意味内容が分かりやすいこと」と「音の覚えやすさ」が重要となっている。それは老若男女問わず、サイン音を聞いた人（受け手）がサイン音より同じイメージを想起できることが望ましいからである。

サイン音の研究として、山内・高田・岩宮らの行った「サイン音の機能イメージと擬音語表現」がある。この先行研究では、サイン音の機能イメージ、音響的特徴、音素的特徴（擬音語表現）の三つについての関係を明らかにしている。

2. 目的

本研究ではサイン音の機能イメージと音素的特徴の関係について追調査を行う。家電製品のみを対象として、機能イメージから想起される擬音語表現に対して、音素的特徴から分析を行う。

3. 調査 機能イメージにおける擬音語表現の調査

調査では、機能イメージから連想されるサイン音の擬音語表現を収集した。擬音語表現の音素単位の分析を通じて、機能イメージに対してどのようなサイン音を連想しやすいのかを明らかにする。

3.1 方法

調査対象： 本学情報科学部情報ネットワーク学科 3 年生 94 名

調査内容： 「サイン音の機能イメージと擬音語表現」(山内・高田・岩宮 2003)より、「操作」「状態提示」「開始」「終了」「呼出」「警報」「警告告知」「要請」「許可」「報知」の 10 個の機能イメージから、予備調査によりそれらのうちから擬音語が想起されやすい「操作」「開始」「終了」「呼出」「警報」「警告告知」「要請」の 7 個を選定した。各機能イメージに対し想起される擬音語表現に関して自由記述形式で回答を求めた。

手続き： A4 サイズで表紙を含め用紙 3 枚からなる冊子を作成した。調査日は 11 月 16 日（水曜日）、NS 学科 3 年生後期科目の授業中とした。授業開始時に調査冊子を配布した。

回答時間として説明 5 分、回答時間 10 分、計 15 分設け、記入させた。その後、回収した。

3.2 結果

各機能イメージに対して、擬音語数の平均は 57.86

語であった。収集された擬音語表現を種類ごとにまとめた結果、擬音語の種類数の平均は 11.14 語となった。

擬音語をそれぞれ音素に変換した結果、擬音語を構成する音素の種類数は、平均で 8.71 語であった。さらに、音素のつながりに注目し、音素の遷移図を作成した。図 1 に「操作」と「開始」の各機能イメージに対する音素遷移図を示す。「操作」に対しては、{p} {i} {Q} のつながりが多く現れている。これは「ピッ」という擬音語に対応している。これに対して、「開始」の系列では {p} {i} の後に {Q} と {H} に分岐している。{H} は長音記号を表し「ピー」の擬音語に相当する。

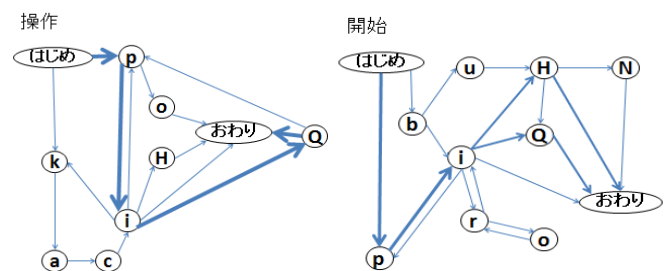


図 1 音素遷移図（左：操作／右：開始）

機能イメージに対する擬音語の類似点として、{p} の音素から始まる擬音語が多いことがわかった。また、{Q} と {H} の音素も多用され、促音により音を切る、または長音により音を伸ばすことがサイン音では多くなることがわかった。

機能イメージによって異なる点として、繰り返しの有無がある。繰り返しがあるものとして「終了」「呼出」、ないものとして「操作」「開始」が挙げられる。

4. まとめ

調査の結果、機能イメージごとに様々な音素的特徴があることが分かった。機能イメージから想起されるサイン音の擬音語表現には、多くの繰り返しのパターンや類似点、相違点があることが分かった。

参考文献

- 日本サインデザイン協会（1998） 音による新しいサインデザイン活動領域形成のための調査研究事業報告書 p.6
- 山内勝也・高田正幸・岩宮眞一郎（2003） サイン音の機能イメージと擬音語表現 日本音響学会誌 59 巻（4 号） 192-202